

# 教育分野におけるベネッセの生成AI活用

作成者: Manus AI

作成日: 2026年5月30日

## 要旨

ベネッセの生成AI活用は、単にChatGPT型の応答機能を教育サービスに追加するものではなく、同社が長年蓄積してきた**教材、学習データ、指導ノウハウ、キャラクター資産**を組み合わせ、児童生徒の発達段階に応じた「学びの伴走者」を設計する取り組みとして展開されている。2023年の小学生向け「自由研究お助けAI」から始まり、2024年の「チャレンジAI学習コーチ」、幼児向け会話型AI「しまじろう」、さらに2026年提供開始の新「進研ゼミ 高校講座」におけるAI質問・ビジュアル解説・学習計画作成へと、対象年齢と活用領域を拡大してきた。① ②

③

ベネッセの特徴は、生成AIを「答えを出す機械」としてではなく、**ヒントを出し、考え方を広げ、つまづきを言語化し、理解から定着まで支援する対話的な学習支援基盤**として位置づけている点にある。とくに小学生向けサービスでは、保護者承認、情報リテラシー学習、目的外利用の制限、質問回数制限、入力データをAIの再学習に利用しない方式など、安全性への配慮が明示されている。④ ⑤

一方で、生成AI活用には課題もある。ベネッセ自身の調査では、小学生の生成AI認知率は2025年時点で74.7%に達し、認知層の利用経験は80%以上にのぼる一方、家庭で生成AIの使い方について話したことがある家庭は約5割にとどまる。また、保護者の65.2%がポジティブな変化を感じる一方、49.3%は「自分で考える機会が減った」といったネガティブな変化も感じている。⑥ したがって、今後の焦点は、生成AIを導入するか否かではなく、**学習者の自律性、情報リテラシー、思考力を損なわない設計と運用**にある。

## 1. 背景：教育における生成AI利用の拡大

生成AIは、要約、翻訳、問題作成、添削、対話支援、個別説明など、教育と親和性の高い機能を備えている。ベネッセ教育総合研究所は、生成AIが「個別最適化」「即時フィードバック」「対話的支援」を実現しうる一方で、導入すれば自動的に効果が生まれるわけではなく、授業設計や教員の役割が重要であると指摘している。⑦

ベネッセ教育総合研究所のVIEW next記事は、生成AIについて「個別最適化」「即時フィードバック」「対話的支援」を実現できる可能性を示しつつ、効果は授業設計や活用方法に依存すると論じている。⑦

子どもたちの利用実態を見ると、生成AIはすでに家庭学習や学校外学習に浸透している。東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所の「子どもの生活と学びに関する親子調査2025」では、学校外学習における生成AI使用率は小学4～6年生で約10%、中学生で約30%、高

校生で約60%近くに達したとされる。<sup>8</sup> また、進研ゼミ高校講座の2025年調査では、高校生の87.6%がこの1年で学習にAIを活用したと回答している。<sup>9</sup>

調査・出典	対象	主な数値	示唆
ベネッセ「生成AIの利用に関する意識調査」2025	小3～小6と保護者1,032組	小学生の生成AI認知率74.7%、認知層の利用経験80%以上	小学生段階でも生成AIが身近な存在になっている
「子どもの生活と学びに関する親子調査2025」	小学生～高校生の親子	学校外学習での使用率は小4～6で約10%、中学生約30%、高校生約60%近く	学齢が上がるほど学習ツールとしての利用が増える
進研ゼミ高校講座「高校生の意識・まなび調査2025」	高1～高3 756人	学習へのAI活用経験87.6%、わからない問題を生成AIに質問63.6%	高校生ではAIが学習の伴走役になりつつある

このような環境下で、ベネッセは子どもが汎用AIを無秩序に使う状況に対し、教育目的に合わせて制御された生成AI体験を提供しようとしていると考えられる。

## 2. ベネッセの主な生成AI活用事例

### 2.1 小学生向け「自由研究お助けAI」

ベネッセは2023年7月、小学生と保護者を対象に、夏休みの自由研究を支援する生成AIサービス「自由研究お助けAI」を無償提供した。提供期間は2023年7月25日から9月11日までで、進研ゼミ会員でない家庭も利用できた。<sup>4</sup>

このサービスは、自由研究のレポートを生成AIに作らせるものではなく、子どもが自身の興味をもとにテーマや観点、進め方を考えるためのヒントを、AIキャラクターとの対話を通じて得る設計であった。ベネッセは、1つの答えを提示するのではなく、さまざまな観点で自由研究のアイデアやテーマを見つけるためのヒントを提供すると説明している。<sup>4</sup>

安全性の面では、保護者のメールアドレスによる認証、親子での利用、有識者監修の情報リテラシー学習、目的外利用への警告、1日の質問回数制限、回答文字数制限が設けられた。さらに、Microsoft Azure OpenAI Serviceをベースに、入力内容をAIの再学習に利用しない方式で提供されたと説明されている。<sup>4 5</sup>

観点	内容
対象	小学生と保護者

目的	自由研究のテーマ決め、観点整理、進め方の支援
教育的特徴	答えを与えるのではなく、興味関心を広げ、問いを立てる支援
安全設計	保護者承認、情報リテラシー学習、目的外利用制限、質問回数制限、再学習不使用
意義	小学生が生成AIと安全に出会う初期体験の設計

この事例は、ベネッセの生成AI活用における基本方針、すなわち**思考を代替するのではなく、思考を促すAI**という方向性を示す初期の取り組みである。

## 2.2 「チャレンジAI学習コーチ」

「チャレンジAI学習コーチ」は、小学4年生から中学3年生の進研ゼミ会員を対象に、学習内容や学習方法についていつでも質問できるオンラインサービスである。2024年3月から提供され、2024年には第42回IT賞のIT賞（顧客・事業機能領域）を受賞した。<sup>2</sup>

このサービスは、進研ゼミ55年の指導により培われた学習データ分析や指導コンテンツに、生成AIを含む最新AI技術を組み合わせて実現された。ベネッセは、保護者から聞かれる懸念として「答えを直接聞く」ことを挙げ、それに対し、チャレンジAI学習コーチは答えを直接教えるのではなく、子どもの疑問に寄り添い、AIキャラクターとの対話を通じて考え方や視点を広げ、自ら答えにたどり着けるように開発したと説明している。<sup>2</sup>

特徴	内容
わからないことの言語化	子どもが「何がわからないか」をAIとの対話で掘り下げる
信頼性の担保	進研ゼミの蓄積コンテンツや指導ノウハウを活用
意欲支援	褒めや励ましを会話に取り入れ、質問への心理的ハードルを下げる
人間との連携	AIで解決できない場合、教科アドバイザーが回答するサービスへ接続

この仕組みは、生成AIを単独の自動応答システムとしてではなく、教材コンテンツ、人間の専門家、学習履歴と連携する**ハイブリッド型学習支援**として設計している点で注目される。

## 2.3 幼児向け会話型サービスAI「しまじろう」

ベネッセは、ソフトバンクロボティクスと共同で、幼児向け会話型サービスAI「しまじろう」を開発した。このサービスは、専用スマートフォンアプリと、スマートフォンをホールドできる専用ぬいぐるみを組み合わせて使用する。しまじろうの声を再現したAIとの自由会話、遊び、歌、読み聞かせ、日本語・英語対応、保護者向けレポートなどが提供される。②

ベネッセは、こどもちゃれんじで培った35年の幼児教育の知見を活かし、生成AIを独自にカスタマイズしたと説明している。会話の内容から子どもの興味や感情を分析し、保護者にレポートする機能も備える。②

この事例は、生成AIが学力向上のための質問応答にとどまらず、幼児期の語彙、会話、英語接触、遊び、親子コミュニケーション支援に広がっていることを示す。一方で、幼児のAI利用には、年齢に応じた安全性、保護者の関与、情緒的依存への配慮がとくに重要である。

## 2.4 新「進研ゼミ 高校講座」：AI質問、ビジュアル解説、AIテスパ

2026年3月25日から提供開始された新「進研ゼミ 高校講座」は、ベネッセの生成AI活用が最も広範に組み込まれた事例である。新講座では、「テスパ神」をコンセプトに、定期テストの成績向上を重視し、AI質問、AIテスパ、AI問題演習、ビジュアル解説などが導入されている。③

AI質問「しまじろう」は、日々の学習でわからない問題を撮影すると、進研ゼミの教育ノウハウを読み込んだ独自生成AIが24時間いつでも解き方を解説する機能である。単に解答を提示するのではなく、まずヒントを示し、ステップ解説を通して理解を深め、その後に類題や動画講義を提案することで、理解から定着までを支援する。③

さらに、一部の問題では、問題を読み込み、その場で図・グラフを生成して図解で解説する「ビジュアル解説」を提供する。ベネッセは、これを家庭学習向け生成AI活用アプリにおいて日本初の取り組みとし、Google Cloud主催「第4回 生成AI Innovation Awards」で最優秀賞を受賞したと発表している。③

「AIテスパ機能」は、テスト範囲のプリントを撮影または入力すると、AIが出題範囲や重要ポイントを分析し、学校・教科書・学力に応じた学習計画やカリキュラムを提案する機能である。加えて、約1,600本の映像授業と、約2,000億通りから最適出題されるAI問題演習を組み合わせることで、個別最適化された学習サイクルを構築している。③

機能	生成AI・AIの役割	教育的効果として期待される点
AI質問「しまじろう」	写真で送られた問題に対し、ヒント・ステップ解説・類題提案を行う	わからない問題を放置せず、即時に理解へつなげる
ビジュアル解説	問題に応じて図・グラフを生成し、視覚的に説明する	文章だけでは理解しにくい内容の可視化
AIテスパ	テスト範囲を分析し、個別の学習計画を作成する	限られたテスト期間の効率的な学習

AI問題演習	解答傾向を分析し、最適な問題を選ぶ	理解度に応じた反復と定着
--------	-------------------	--------------

この高校講座のリニューアルは、生成AIを単発の支援機能ではなく、学習計画、質問、解説、演習、定着、動機づけにまたがる**包括的な学習OS**として組み込む試みと評価できる。

### 3. ベネッセの生成AI活用モデル

ベネッセの事例を横断的に見ると、同社の生成AI活用にはいくつかの共通パターンがある。第一に、生成AIを汎用的な自由入力ツールとして開放するのではなく、自由研究、教科質問、幼児会話、定期テスト対策といった**明確な教育目的**の中に配置している。第二に、進研ゼミやこどもちゃれんじの蓄積資産と組み合わせ、AI単独ではなく、教材・動画・類題・人間のアドバイザーとの接続を重視している。第三に、「答えを出す」よりも「問いを深める」「理解の道筋を示す」「学習者の行動を促す」設計が強調されている。

モデル要素	ベネッセにおける具体化	教育上の意味
目的限定	自由研究、質問、テスト対策、幼児会話などに用途を絞る	誤用や丸投げを抑制しやすい
教育資産との統合	進研ゼミ55年、こどもちゃれんじ35年の知見を活用	汎用AIとの差別化と信頼性向上
ヒント型支援	直接回答ではなく、考え方・視点・ステップを提示	思考力低下への対策
人間との接続	AIで解決できない場合、教科アドバイザーへ連携	AIの限界を補うハイブリッド設計
安全設計	保護者承認、再学習不使用、質問制限、リテラシー学習	子ども向けAIとしての責任ある運用

このモデルは、教育分野で生成AIを活用する際の重要な示唆を含んでいる。教育サービスでは、AIの性能そのものだけでなく、**どの学習場面に、どのような制約と支援構造を持たせて組み込むか**が成否を左右する。

### 4. 効果と期待される価値

ベネッセの生成AI活用から期待される価値は、主に四つに整理できる。第一に、家庭学習中の「わからない」を即時に解消できる点である。従来、家庭学習では質問できる相手が限られており、疑問が解消されないまま学習意欲が下がることがあった。AI質問機能は、24時間の対話的支援によって、この問題を緩和しうる。 ② ③

第二に、学習者の興味や状況に応じた個別最適化である。自由研究お助けAIでは、子どもの興味、学年、使える日数に応じてテーマや進め方を提案する。高校講座では、テスト範囲、教科書、理解度、解答傾向に基づいて学習計画や問題演習を最適化する。③④

第三に、学習の可視化と理解促進である。新高校講座のビジュアル解説は、図・グラフをその場で生成し、文章では理解しづらい内容を視覚的に示す。これは、生成AIがテキスト生成だけでなく、マルチモーダルな教育支援へ進化していることを示している。③

第四に、AIリテラシーの育成である。小学生向け自由研究AIでは、利用前に生成AIの安全な使い方を学ぶ動画を提供し、誤情報や目的外利用への注意を促している。これは、AIを避けるのではなく、**安全に使いながらリスクを理解する教育の一形態**といえる。④

## 5. 課題とリスク

ベネッセの取り組みは先進的である一方、教育分野の生成AI活用には慎重に検討すべき課題が残る。第一に、学力向上や思考力向上に対する客観的な効果検証である。公開情報からは、サービスの機能や利用実態、受賞歴は確認できるが、学力向上や学習意欲への長期的効果を独立に検証したデータは限定的である。

第二に、生成AIへの依存である。ベネッセの2025年調査では、小学生の利用者の約6割が「分からない時にまずAIに聞く」と回答している。また、保護者の49.3%はネガティブな変化を感じ、その中で「自分で考える機会の減少」が上位に挙がっている。⑥ 生成AIは便利であるが、最初からAIに尋ねる習慣が強まりすぎると、自力で試行錯誤する時間や、友人・保護者・教員との対話機会が減る可能性がある。

第三に、家庭や学校でのルールづくりの遅れである。2025年調査では、生成AIの使い方について話したことがある家庭は約5割にとどまった。⑥ 生成AIの利用が急速に広がる一方で、家庭内のルールや親子の対話が追いついていないことは、誤用や依存のリスクを高める。

第四に、AIの誤情報と透明性である。生成AIは不正確な情報や不適切な内容を生成する可能性がある。ベネッセは保護者同伴、目的外利用制限、情報リテラシー学習などの対策を講じているが、技術的に完全な排除は困難である。したがって、回答の根拠確認、誤答時の訂正、学習履歴やデータ利用の透明性が重要になる。

課題	具体的リスク	必要な対応
効果検証	サービス利用が実際に学力・思考力を高めるか不明確	長期的・第三者的な効果測定
依存	「まずAIに聞く」習慣による自律的思考の低下	ヒント型設計、利用ルール、振り返り学習
家庭内ルール不足	親子で使い方を話し合わないまま利用が進む	保護者向け教材、家庭内ガイドライン

誤情報	AIの回答をそのまま信じる	出典確認、複数情報源の比較、誤答検知
教育格差	AI利用環境の有無で学習支援に差が生じる	学校・家庭双方でのアクセスとリテラシー支援

## 6. 総合評価

ベネッセの生成AI活用は、教育企業としての既存資産を活かし、生成AIを学習者の発達段階に応じた「伴走者」として組み込む実践である。2023年の自由研究支援では、生成AIを安全に体験し、問いを立てる入口を提供した。2024年のチャレンジAI学習コーチでは、小中学生の疑問解消と自力解決を支える対話型学習支援へ発展した。幼児向けAIしまじろうでは、会話・遊び・英語・保護者レポートへと対象を広げた。2026年の新高校講座では、画像質問、図解生成、学習計画、AI演習を統合し、生成AIを学習サービスの中核に据えている。[1](#) [2](#) [3](#) [4](#)

この流れから見ると、ベネッセは生成AIを、教育の置き換えではなく、**学習者、保護者、教員、教材をつなぐインターフェース**として捉えている。とくに、答えを直接与えず、ヒントを出し、思考を促し、必要に応じて人間の支援へつなぐ設計は、子ども向け教育AIとして重要な方向性である。

ただし、生成AIは強力であるほど、学習者の思考や行動を大きく変える。小学生から高校生まで利用が急速に広がる中で、今後は、便利さだけでなく、学習者が自ら問いを立て、情報を吟味し、他者と対話し、自分の言葉で表現する力をどう育てるかが問われる。ベネッセの取り組みは、教育分野で生成AIを社会実装する際の有力な先行事例であると同時に、**AI時代の学びをどのように設計すべきか**という課題を浮き彫りにしている。

## 参考文献

- [1] ベネッセ教育情報 『自由研究のお困りは「自由研究おたすけAI β版」で解決!』
- [2] ベネッセホールディングス 『生成AIを活用した進研ゼミの質問サービス「チャレンジAI学習コーチ」と幼児向け会話型サービスAI「しまじろう」が第42回IT賞を受賞』
- [3] ベネッセコーポレーション 『新「進研ゼミ 高校講座」、3月25日より提供開始』
- [4] PR TIMES 『ベネッセ、小学生親子向け生成AIサービスを7/25から無償提供』
- [5] Asia News Network / The Yomiuri Shimbun 『Benesse helps kids use generative AI for summer homework』
- [6] PR TIMES 『ベネッセ「生成AIの利用に関する意識調査」小学生の「生成AI」認知率74.7%、2023年から約26pt上昇』
- [7] VIEW next 『AI時代、教育と学びはどこへ向かうのか① AI活用のパラドックス』
- [8] VIEW next 『子どもの生成AIの使用状況・意識と学習意欲との関係』
- [9] PR TIMES 『【進研ゼミ 高校講座】高校生の意識・まなび調査2025』